2026_0408「池袋から見た武甲山」日々の理科 4259 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

池袋から見た夕暮れの西の空。低く傾いた太陽の光が大気中の微粒子に散乱され、空全体がやわらかな橙色に染まっています。都市の建物群は黒いシルエットとなり、その向こうに幾重にも重なる山並みが、淡いグラデーションを描いて浮かび上がります。東京は一見すると人工物に覆われた都市ですが、実は関東平野の西縁に位置するため、空気が澄んだ日には遠くの山々を望むことができる「望岳都」ともいえる環境を備えています。

この日まず目に入ったのが、秩父の名峰である武甲山（ぶこうさん）です。標高 1304 メートルのこの山は、石灰岩からなる地質を背景に、長年にわたる採掘によって山体の一部が大きく削られています。その結果、特に右側の斜面が直線的に切り立った、自然の山とは思えない独特の山容を示しています。本来は円錐状に近いなだらかな姿をしていたと考えられますが、人間活動によってその形が大きく変化した、いわば地形改変の象徴的な存在でもあります。

都市の空に重なるこれらの山影は、日常の中に広がる地理的スケールの大きさを静かに教えてくれます。ビルの隙間から遠望できる山々に目を向けることで、東京という都市の位置や周囲の地形への理解も一層深まります。これからも、都内のさまざまな地点から見える山々を探究し、その見え方や成り立ちを観察していきたいものです。